

【76】 千曲川三題

川と詩や歌の世界とは昔から非常に相性が良く、川をうたったものといえば、万葉集から始まって現代の学校の校歌にいたるまで、無数の作品があります。

私は学生時代から信州（長野県）の山や温泉によく行ったので、千曲川（信濃川の長野県内の呼び名）には懐かしさとロマンを感じます。そんなわけで、詩や歌に千曲川とあるとつい反応してしまいます。私の好きな千曲川の詩を3つ紹介します。先刻承知といわずおつきあい下さい。

第一は余りにも有名な島崎藤村の「千曲川旅情の歌」の前半です。この部分を「小諸なる古城のほとり」とも云います。明治末期の作ですが、中学校で教わった人も多いと思います。

	千曲川旅情の歌	島崎藤村
小諸なる古城のほとり	あたたかき光はあれど	暮れ行けば浅間も見えず
雲しらく遊子悲しむ	野にみつる香も知らず	歌哀し佐久の草笛
緑なす繁縷は萌えず	浅くのみ春は霞みて	千曲川いざよふ波の
若草も籬くによなし	麦の色はづかに青し	岸近き宿にのぼつ
しろがねの衾の岡辺	旅人の群はいくつか	濁り酒濁れる飲みて
日に溶けて淡雪流る	畠中の道を急ぎぬ	草枕しばし慰む

第二は最近の歌謡曲の詞です。

水の流りに花びらを	明日はいずこか浮き雲に	一人たどれば草笛の
そっと浮かべて泣いたひと	煙りたなびく浅間山	音色哀しき千曲川
忘れな草にかえらぬ初恋を	呼べどはるかに都は遠く	よせるさざ波暮れゆく岸に
想い出させる信濃の旅路よ	秋の風立つすすきの径よ	里の灯ともる信濃の旅路よ

そうです。猪俣公章作曲でデビューしたての五木ひろしが唄って大ヒットしました。

作詞者はしろうとの山口洋子という銀座のクラブのママさんとのことです。

第三は地元、長野県ではともかく全国的にはあまり知られていない津村信夫の作品です。

千曲川	津村信夫
その橋はまこと長かりきと	若き日よ橋を渡りて
旅終わりは人にも告げむ	千曲川汝が水は冷たからむと
雨ながら我が見しものは	忘るべきはすべて忘れはてにき
戸倉の燈か上山田の温泉か	

彼は、1909年神戸生まれ。大学卒業後は東京住まい。病弱で、よく信州を旅し、信州を愛し、信州の女性を妻にし、1944年に35歳の若さで亡くなった作家です。

この詩はどこか湿っぽく定年退職後の勤め人の気持に通じるところがあり、今の自分のことのような気がします。

蛇足ですが、最近の市町村合併で、上山田温泉も戸倉の街も千曲川をまたいで「千曲市」に括られてしまいました。